

くなつたと述べ、宋金の國境が略々小麥地帯と水稻地帯とを分ち南北の經濟的發達の差異に加へ民族的要素のため、北支は戸數による郷、里、南支は土地の廣さによる都、堡と名けられる村落が發達した。更に勸農の目的で世相の時設けられた社制の内容を説明し、村民の精神的結合を計ることから村落自治體と變化しゆくけれども元朝が異民族に對する警戒の必要上民間に武器を渡さず従つて治安維持の規則を缺いてゐる。第五章明代では元から變化してきた地方制度が明の太祖の漢唐復古を標榜する帝權伸長政策により新面目をととのへたこと、そして課税對象としての里甲とその精神的支柱たる里老人の制度との關聯を論じ、元の社長の制を襲ひ民間の訴訟・教化・勸農・相互・扶助を主る里老人も、土地と耕者の結合を前提として保持される里甲の中に外部の勢力が入りこむことにより崩壞し、明中期以後、宋の遺制たる郷的・保甲が夫々里老・里甲にかはり賦税の對象からはなれた自治機能をもつ自然村へ復歸した。明末にこの兩者を融合した郷甲法、或ひは村落自治機能の全ての要素をもつ會とよばれる地緣團體が發生し清代の保甲への推移が考へられる、と述べ、第五章清代では清朝の宣撫政策に關して弭盜の目的の爲の總甲法が後に旗の逃丁防止の目的と變じ、明末に融合してきた郷約と保甲とが分れたといひ、清末に及んでは教匪勦撫のための團練、それが官制にとり入れられた保甲局について記し、清朝が治安が被支配者たる漢人の組織する民兵により維持されるといふ事情がその滅亡近きを示すとなし、第六章民國に於ては北京政府の地方自治の條例や國民政

府の共産軍討伐の目的で實施した保甲制、更に政治活動の單位たる縣制の内容、ひろく保衛組織と呼ぶべき郷團、民團、公安團自衛團等に就て支那事變勃發後の新情勢にふれて筆をおいてゐる。

本書は制限された日子に於て數氏の協同によつて著はされ支那自治制度の組織と發達について系統だてんと努力し或る程度迄の成功を奏したことは誰人も認める所であらう。卷末の資料篇に於て主要な根本資料を陳ねその學的態度を示してゐるが、なほ部分的ではあるが進められてゐる自治體に關する近來學界の業績にも廣く眼を向け、規約・條例の類以外の民間自治の實情を示すべき史料に注意する時には一層よき成果を得たと思はれる。また序説あつて總説なきことに各章毎に前後の脈絡を通じがたからしめまた餘りに地方行政や税制に頁を割いたことが却つて自治制そのものの説明を繁冗ならしめてゐる處がある。然しこれは敘述についてであつて著者達の研究に對する熱意は充分認めなければならぬ。(菊判二七八頁、昭和十四年十二月、中華民國法制研究會發行、定價貳圓五拾錢)(宮川尚志)

### 北支那の戰爭地理

支那歴史地理叢書第三

北山巖 夫著

今次事變以來、我が國人士の大陸への再認識、及び之に伴ふ大陸に對する切實なる知識慾の再燃によつて現れた、所謂汗牛充棟の支那關係刊行物の中には、地理に關する著述も決して乏しくは

ないが、その多くは山川・風物を敘した平凡なる地誌とか、或は私人の紀行であつて少くとも歴史的背景を腦裡に描きつゝ、該地方の地理に親しまんとする者にとつては、甚だ懐らぬものがあり、眞の意味の歴史地理書の出現を久しく待望してゐたのである。支那歴史地理叢書第三として刊行された本書こそは正に斯くの如き要求に應へて出づべくして出で、前に述べた吾人の渴望を十分際してくれるものであると言へよう。

本書は題名の示す如く北支那の戰略地理であるが、從來屢々企てられた無味乾燥なる羅列的出兵戰略史ではなくして、興亡四千年に亙る北支那の歴史の概観であつて、讀者は本書に於て戰略の意義が著しく擴充使用されてゐることを知るべきである、即ち著者は本書執筆に當り、清朝の優れたる地理學者顧祖禹の名著讀史方輿紀要百三十卷が、「山川の形勢に基き、政治の成敗と出兵の得失を説いてゐるのを採用し來つて、巧みに論述を展開したのであるが、その際同じく山川の險要を説き乍らも、單なる歴史事實の説明に終らずして、それらの有つ適要なる歴史的性格の把握に務め、顧祖禹にして猶企及し得なかつた困難なる綜合史的概観を試みたのである。

本書の内容は其の序に於ける著者の言葉を借れば、「第一章に於ては、南北支那の政治的・經濟的關係の歴史の考察を試みるることによつて、北支のその南方に對してもつ意義を明らかにし、第二章に於ては、北支に連る沙漠地帯に住む遊牧民族と、北支の沃野に農耕生活を營む漢民族との交渉を歴史的に觀察することによつ

て、北支のその北方に對して有する意義を明らかにし、第三章に於ては、北支を貫流しあらゆる分野に於て重大なる關係をもつ黃河を觀察することによつて、北支自體の地域性を明らかにし、以下第四章・第五章・第六章・第七章に於て、それぞれ河北省・山西省・陝西省・河南省の歴史の概観と、各省下の著名なる要衝の個別的説明が、簡潔なる筆致によつて記述されてゐる。而して此の場合、著者の意圖は言ふ迄もなく、北支那の全體的歴史的發展であり、支那社會經濟史專攻の著者の鋭敏なる洞察力と透徹せる意見とは、縦横に才筆を驅使して讀者を倦ましめず、又前記讀史方輿紀要が「烈々たる民族意識の凝つて成つたる結晶」であるが如く、本書に在つても軒昂たる著書の惑意は自ら文面に躍動し生氣溢れて、讀者をして轉た爽快の感を興へしめるものがある。

而も此の奔放暢達の行文は、その内容に於て奇矯空疎なるに非ずして、眞率なる著者の周到な準備の下になされたること、一讀直ちに領得されるであらう。唯前半、歴史の概観の詳述に主力を傾倒して、後半、個別的要衝の解説に些か筆鋒鈍り單調に墮した憾みあるも、これは夫々類似様相を具有する地形の描寫に際しては又已むを得ない點であつて、深く責むべきではないと思ふ。

現時我が忠勇なる皇軍將兵の華々しき活躍を眼のあたりにして日夜大陸の數多き地名に接觸する場合、本書は良き指針となつて之を輔けば讀者は該地の特異なる地勢を髣髴と知り得、武勳赫赫たる皇軍奮戰の地が、古來幾度か英雄豪傑の往來せし古戰場なりしことを憶ふとき、洵に興味津津たるものがあらう。此の意味に

於ても、歴史愛好者のみならず、廣く一般人士の是非座右に置くべき良書として推薦したい。

最後に本書に續いて、著者によつて中支那更に南支那の競争地理が相ついで工作され、事變下殊に意義ある三部作として完成さる、日を期待して並雜なる紹介を終る。(四六判一四四頁、圖版四、別刷地圖一、昭和十四年十二月、富山房發行、定價壹圓拾錢〔岡本午一〕)

### 東洋に於ける素朴主義の民族と

#### 文明主義の社會

支那歴史地理叢書第四

宮崎市 定著

私が曾て讀んだ東洋史の概説書の中で、その著者が獨自の定見を以て終始一貫せる方針により一冊を書て成したと思はれるのはたつた二つである。一つは私の父の「支那論」であり、一つは岡崎文夫博士の「支那史概説」である。それに概説書ではないが矢野仁一博士の「近代支那外交史」がある。勿論どんな書にしても多かれ少かれ著者の考への表はれないものがある筈はないが上記諸書は中でも特にはつきりしてゐるといふ意味なのだ。宮崎先生の此書は數少いこの種の著書の一つに加へられると思ふ。その旗色鮮明なる點では寧ろ上の諸書よりも明確であると思はれる。唯從來の名家の書にいくらか劣ると思はれるのは著者の方針の適用に急なる餘り種々の點に於て多少の杜撰さが生じてゐる感みがある

ことであらう。

然らば本書の方針とは如何なるものであるか。それは書を成すに當つて先づ重要な根本概念が定められてゐる事これである。標題の「素朴主義」と「文明主義」が即ちこの根本概念だ。この二つの傾向の對立の状態に於て東洋史を理解し、この對立の状態の動き方の中に「進歩」といふ更にも一つ次元の高い概念を導き出さうといふのが本書の方針である様に思はれる。この事は本書の籃の分け方にそのまゝ表はれてゐる。第一篇「古代に於ける文明主義社會の成立」に於て先づ黄河中流の鹽の産地を中心とする文明社會の成立を説いて居る。そしてこの文明社會なる概念を作るのに常に素朴民族なる對立的概念を以て裏付けしてゐるのが注目し得る。歴史上夷狄がはつきり勢力を持ち始める時期は普通漢の時の匈奴といふ事になつてゐるが、本書に於ては殷周の革命から既にこの二つの社會の相尅状態として觀てゐる。(尙古代文明社會發祥の主なる原因を通説の如く農業とせず、鹽の産出によつて説明したのも本書の特色である。)第二篇「中世に於ける素朴民族の活動」に於ては文明社會に刺戟されて自覺した周圍の未開諸民族が遂に中原の地に入り込んで漢人の國家社會を脅した事を詳述して素朴主義の勝利を説き、同時に素朴民族が文明社會に同化されてはその素朴性を失つて國を亡ぼすといふ、いはゞ素朴民族の弱味をも併せ述べて居る。第三篇は最も興味深い篇である。即ち文明社會の人間達も近世に至つて遂に素朴主義の長所を認め、朱子や王安石の如く文明社會に素朴主義を取り入れんとするものさへ